

することの一致点をさぐるという学習課題ができた。でもこんな難しいことにすぐ取り組むほど大胆ではないので学校の小山を駆け下りさせ、ピッチを早めることから始めよう。

「小学生ではスタンディングスタートとクラウチングスタートとどっちが早いと思う。前傾姿勢を保つ筋力がなければスタンディングのほうが早いんだよ。それにスターティングブロックがなければ何にもならないんだよ。」
 そうか。考えてみればそうだ。発達も考えないで形だけ教えることのおろかさよ。これはみんなに教えずにや。

「他人の考えを鵜呑みにして、すぐ自分が考えたように言う人がいるけど、ちゃんと自分でも本に当たったり実践して確かめてから言うべきだよ。」

いいんだ。いいんだ。これは早く言ったほうがいい。間違った実践が少しでも減るから。もし自分で実践して違うよと言ってくれればしめたもの。その時は荒木先生に責任を取ってもらおう。

「何時間で何人できたは駄目だよ。何回で何人できたかでない。時間は学級の生徒数によってもやる回数が違ってくるし、放課後の練習は含まれないからね。」

に、がんばれと言うのは指導の放棄である。勝手に努力しろと言っているのと同じ。できないのはあなたの努力不足。実に冷たい指導。そう科学的に原因を分析し、きちんとできるための方法を提示してあげることこそ温かい指導なんだ。よく分かった。荒木先生の話にはいつも理論の裏づけとして、私たちでも実践的に試せる例が出てくる。きつと自分で試す中から理論が生まれているからだと思う。

「丹下先生が舟を漕ぐだろう。先生が上で怒鳴る役。俺が側泳で力のない人といっしょに泳ぐんだけど、力が尽きるとスーと沈むんだよね。もがいたり助けてくれなくていいわいんだよ。そのとき腰を支えてしばらく泳いでいるとまた泳げるようになるんだよ。」

遠泳が全国大会であったころの話である。泳げるようになったことを遠泳で確かめるなんてすばらしいことだ。自然との結びつきがあった。子どものころいっぱい海で遊び、突然潮の流れが変わったり、あるところの何時からは流れが起るなどという海の怖さを多少知っている私は、遠泳をやるための大変な苦勞と準備を思い羨ましかったものだ。

「荒木さんは飲むといいことを言うんだよね。だから俺

バック転の指導に夢中になって、4年生で全員できたと喜んでいた時だった。そうか俺の指導によってできたと言いたいなら、こんな指導で何回練習させればこんな感覚が身につく、何人中何人はできるようにする、と言えないといけないんだ。実践に対する妥協やごまかしを許さない厳しい姿勢を感じた。

「あのね。みんなできたと言っても、教えないでもやってみせるだけでできる子がクラスには何人かいるもんだよ。」

自分の指導で全員できたなんてうぬぼれてはいけないのだ。

「科学的だから温かいんだよ。」

科学的というと数学みたいに答えがひとつしかなくて、いろいろな人の感情や思いを切り捨ててしまうような気がする私はなんだか変な気がした。

「指導する方法や中身がないときは、がんばれと言うしかないんだよ。」

そうだった。跳び箱が跳べない子に、いくらがんばれと言っても跳べるようにはならない。跳べるようになるための方法を教えずにはならないのだ。きちんと、なぜ跳べないか分析し跳べるようにしてあげることなし

は荒木さんと飲むときはいつもノートを持っていて書いていたんだよ。」

堀江さんの言葉。私もさつそく真似たのだがノートをそのたびに忘れてくる始末でどうにもならなかった。これはもう聞きたいことを聞いて後は覚えていただけであとでノートに書こうと決めることにした。

系統性について

(1) ドル平との出会い

私が初めて系統性研究の一端に触れたのは、群馬のコープシャトー（ホテル）で行われていた関東ブロックの水泳研究会の時である。このとき初めてドル平をちゃんと教わったのだが、曲がりなりに、ある程度クローリングで泳げた私にとっては、とつてもなじみないものであった。トン・トンのびよってパツ。何だこの泳ぎは。まず全然前に進む気がしない。パツと呼吸した後は、深く沈みなかなか浮いてこない。とつても滑らかに、楽に泳げると思っていた私には期待はずれだった。でもそれはそれ、同僚であり大先輩であった奥田先生にやろうと言われ、子どもに指導することになった。それが不思議なことに子どもがどんどん泳げるようになっていくのだ。パツで